

浄

monthly JODO

土

2014
February·March

2/3

合併号



法然上人讃仰会

2014
表紙のひと

花写



芝崎純子

撮影 Keizo S.

ヨーロッパフラワー連盟講師資格を取得し、
2007年から東京・港区白金台の自宅でフラワーサロンを主宰。
生花、プリザーブドフラワー・アーティフィシャルフラワーなど
ヨーロッパスタイルを基本のLesson開催のかたわら、
フラワーギフトアレンジを提案。
特に、仏事の供花を扱うブランド【花写】を立ち上げ、
生花に特殊な加工をして長期保存できる
プリザーブドフラワーの仏花ギフトアレンジに定評がある。
墓石用のアーティフィシャルフラワーのアレンジ等
仏壇の供花は、
一人暮らしで水替えが大変という年配の方々からも人気で、
手元供養で小さな花のアレンジを添えるのは、毎日の供養の際、
遺された者の心に穏やかさ優しさを与える、という。
法事やお盆、お彼岸など、また、お悔やみのフラワーギフトとし
て注文も多く、
いま各界注目のアーティストである。
花写 <http://www.ca-sha.net>

浄土

2014/2・3月号 目次

春彼岸のこと	吉田 嘉雄	2
会いたい人 中村扇雀さん (下)	関 容子	12
響流十方	袖山 榮輝	20
連載小説 渡辺海旭	前田和男	24
江戸を歩く	森 清鑑	34
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙・表紙裏＝2014「浄土」表紙の人 【花写】芝崎純子

背表紙裏＝泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

浄土アーカイブ 昭和48年3月号

ひがん法話

春彼岸 のこと

東京目黒・蟠龍寺前住職

吉田吉雄

よしだてつゆう

暑さ寒さも彼岸までといいますが、季節の変り目に迎えるこの仏教行事はいかにも自然の美しさとともに生きてきた日本人らしいものといえます。

古来、立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至は八王日とよばれて、陰陽の交替の日として季節の変わり目となっております。

とりわけ寒い冬が終って、まずのぞんでいた春を迎える霽開気（はれあけ）のあふれているのが春の彼岸です。

花もそろそろ咲きはじめる頃はうれしいものです。

仏教では世界を三界（よっかい）即ち欲界・色界・無色界（むしきかい）の三つに分けて考えました。

この世界の中の色界の頂上を「色究竟天（しきくきやうてん）」と申しまして立派な宮殿があり、その宮殿の前に「天正樹（てんじょうじゆ）」という木があつて春になると美しい花が咲いて七日にして散ります。青・黄・赤・白・黒・紫・翠の七色の花弁はとてもきれいで、すばらしい香を放っています。

これが秋になると七色の実（み）になるとされています。花が開いている間が七日間で、実（み）がなっている間が七日間ですから、彼岸も中日をはさんで一週間とされているのです。

また、欲界の中に「夜摩天」^{やまてん}と「兜率天」^{とそつてん}という二つの世界があり、ちょうどその中間に「中陽院」^{ちゅうよういん}という城がある。つて、その中に「雲処台」^{うんじょだい}とよばれる小高い広場があり、そこに毎年彼岸になると七日間、天上界の方々が集まって、下界の人間の演ずる善事・悪事の行為について話しあうとされています。

場合によつてはきびしい審判となることもあるでしょう。しかし、天正樹のある「芬薫として香気風を送る」のような美しい背景の中での話し合いは自然と和らいだものとなるような気がいたします。

天上界は、華ばかりでなく天鼓・天樂等の音楽や舞踊も用意されているのですからなおさらのことです。

以上の説話はおそらく後世の人が作つたものと思われるですが、お彼岸には善いことをして天上のよい審判を受けたかと思えるから不思議です。

それにしても、仏教行事のある度毎に、この小さい自分を美しい自然と宗教という大きい世界にとけこませて考えてゆく東洋人の感覚は素晴らしいと思います。

さて、もともと彼岸という語は梵語の波羅蜜多（はらみつた）の訳語で、到彼岸という語をあて、彼岸に到達する

という意味であります。

私共浄土教徒は彼岸を極楽浄土とうけとつています。阿弥陀如来のおられる浄土へ往生したいと願うのが浄土願生者なのです。

ですが、ものの考え方、うけとり方は一つだけとは限りません。時と処と人によつて違う場合もあります。特に仏教の教えは、その意味する内容が非常に深いものですから、いくつかの面をもっていると思います。

すなおに浄土願生者としてうけとつてゆくのが本来ですが、一面力強い実践力を主張するやり方もあります。

波羅蜜多を六つの項目にわけて考えてみますと、

- 一 布施（ふせ） ほどこす
- 二 持戒（じかい） つつしむ
- 三 忍辱（にんにく） がまんする
- 四 精進（しょうじん） はげむ
- 五 禪定（ぜんじょう） 心をしずめる
- 六 智慧（ちえ） 円満な智慧

一つ一つ目標を定めて実践してゆくのです。

季節の美しさの中にとけこんでふんわりとうけとつたお彼岸、天上界の夢幻のようなことの中に味うお彼岸も、そ

の裏側には、ちゃんと折目正しい仏教の実践目標が用意されていたのです。この大項目の一つをとってみても、仲々内容の豊かなものばかりではありませんか。

私達は、まわりから受け取ってばかりいるのですから、ほどこさねばなりません。人につくすのです。恩を返すのです。(布施)

わが身のわがままをつつしみ、がまんして(持戒・忍辱)物事にはげむ(精進)ことです。

でも口でいうことはできても実行はむずかしいものです。それで心をよく整理して、しずかにその深いところをみつめることをせねばなりません。(禪定)

さて、私にそれができるでしょうか。

円満な智慧があればできます。円満なというのですから、かかるところがないのです。

なかなかむづかしいことです。

如来のお力をかりなければならぬでしょう。

自分で実践してゆくのですから積極的なうけ取り方と云えます。実践してゆくうちに勇氣も出てくるでしょう。

「人生は苦なり」として正面から物事にぶつかってゆく姿が生まれてきます。

また、この六波羅蜜を別な立場で考えた人もおります。

それは自分の行動してきた生活を整理する方法として受けとっているのです。

自分の生活で布施にあたる部分があつたかどうか。そのやり方が正しかつたかどうか。

何かの機会にもう一度吟味してみることです。このように目標を定めて実践してゆく時と、生活を整理してゆく時とでは少しちがつたやり方だと思いますが、実際には両方とも必要なことです。

少し理屈ばかりでしたが、このことを腹におさめて、お彼岸になれば天正樹の七色の実をまねたと言われる彼岸団子をつくり、仏に供養し、先祖の墓にお詣りして、何事もなく静かに帰ってゆく仏教者の姿は日本人らしいものだと思います。

彼岸の中日には太陽が一日の行動を終って真西に沈んでゆきますが、聖徳太子は大阪四天王寺の西門を開いて礼拝されたと伝えられています。

東方には薬師如来をまつり、その眉間の白毫びやくごうから光がでて西方の阿弥陀如来のいます八葉の蓮華台（如来の座っておられる台）におさまると信ぜられたものです。

四天王寺には阿弥陀如来像もまつられており、後白河法皇も、源頼朝もお詣りされたと伝えられておりますが、聖徳太子がそのはげしい時代に生きられて、国づくりと仏教興隆のために多くをつくされ、そして西方に向って礼拝された姿は、乱世に生き、力一杯に生きた人ほど、強く西方浄土をおがめるのではないかと思わせます。

浄土教のよりどころとなっている經典に、無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経がありますが、この観無量寿経の中に日想観ということが説かれています。

宗祖法然上人の師善導大師はこの日想観を説明して「自分の心を定めるために春秋二季をえらび、西方に心向け方法がある。陽は真東より出て真西に没する。弥陀の国は陽の没する処にあり」（観無量寿経『定善義』）とされて西方に陽の没するのをみて浄土を思慕するのを日想観とされたのです。

ここで次のことを書いておきましょう。

前に述べた四天王寺の西門の外に石の鳥居が立っていて、その鳥居の内側に引導石があり、聖徳太子はおなくなりになられてもこの石のところにあらわれて（影向石）ようこうせき西方浄土を願う人々を極樂の東門にみちびきたいと誓われた

と伝えられ、江戸時代には、人がなくなると棺をかついでこの石の前におき、すでになき聖徳太子の引導をうけ、それからお墓を守ってくださる地藏尊の前を通って埋葬したといわれます。(四天王寺『伽藍記』)

このことは無量寿経の日想観の思想が日本において実際に信ぜられていたことを示し、彼岸になりますと殊更に思ひ出すことです。

彼岸は七日間にわたります。誰でも何かを考え、何かを行ずるでしょう。

そして、心から何かを求めるでしょう。

私は浄土願生者です。浄土へ生まれることを願っております。ささやかな波羅蜜行の実践をしたいと思います。

それにも増して法然上人の御指示に従って念仏の一念一念に阿弥陀如来の誓願をたしかめつつ彼岸を迎えたいと思います。

連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

扇雀さんは学業に専念するために大学卒業まで舞台から遠ざかっていたとは言え、踊りだけは藤間勘寿朗師について十五歳くらいまで続けていた。これはとてもよかったことだ。

「同世代の役者ともまったく面識はなかったですから、福助（当時児太郎）さんと同じ年と知って、僕が歌舞伎に戻ったときに彼はもう芸術選奨新人賞を受賞してましたから、ものすごく焦りましたね。この差はそうそう埋まるもんじゃありません。学生時代の友だちに会うと、だめだこれ、もうやめるわ、と弱音を吐いた覚えがあります。」

でも、ここでやめちゃったら他に何の道があるんだと思つて、三味線、琴、鳴物、常磐津、義太夫、それに踊りはまた勘寿朗先生に教わつて、そのうち六本木の藤間宗家（現勘十郎師の祖父）へも伺うようになりました。踊りはとにかく稽古量ですからね、それがあってあとはセンスの問題ですけど、うちの地下の稽古場で一人で稽古してて、気がついた

ら夜が明けていた、なんてこともしばしばでした。人の三倍やって追いつこうとしましたけど、みんなも勉強ざかりだし、その上基礎ができてから進歩が速い。こっちはほんどん離される、のくり返しでしたからね」

そんなとき、ひよんなことから文楽大夫の第一人者、人間国宝の竹本住大夫師との出会いがあった。当時まだ中堅の文字大夫のころだったが。

「復帰して三年目くらいのとき、明治座で里見浩太郎さんの『月形半平太』が出て、制作から僕に出演の声がかかったんです。そこに三林子さんも出て、僕は可愛がつていたできました。あんだ、うちのお父ちゃん知ってるやろ？ って言われるんですが、僕は何にも知らない（笑）。あの有名な文楽人形遣いの桐竹勘十郎（先代）お師匠さんですのにね。当時京子さんは明石町（勝どき橋）のマンションに住んで、遊びにいらっしやいよ、お父ちゃんも飲みにくるから、と言われて何

『寺子屋』の松王女房千代をつとめる扇雀さん。



って、勘十郎お師匠さんに紹介されて文楽の話になって。そのうち京子さんが文字大夫のお師匠さんに義太夫習うから家に来ない？って誘われたんです」

住大夫師の稽古は激しいことで知られており、亡くなった十二代目勘十郎が海老蔵襲名

を前にして稽古をつけてもらっている映像がのちに何回もテレビで放送され、「あんなに厳しくせんでもええやないか、といろんな人からずいぶん言われましたわ」と、いつか住大夫師匠が笑って私に話されたことがあった。

「僕のとときはまだお若かったから、そんなに恐くなかったです。あんた東京生まれやからとにかく訛りだけは氣いつけや、って。東京の言葉は義太夫から見れば訛ってることになるんですね。まず君は『裏門』（『仮名手本忠臣蔵』三段目、おかる勘平が駆落する場面）から始めなさい、ってお稽古してくださいって、弟子も連れてこないし、一人でチンとかツンとかおつしやらずに、張り扇だけでいいねいに教えてくださいました。」

その後、役がつくようになって『寺子屋』の松王女房千代をつとめたときは『寺入り』（菅秀才の身替りのために自分の子の小太郎を寺子屋に連れてくる）から教わりましたし、

それから関西で玉三郎のお兄さんが『先代萩』（政岡）を出して僕を八汐に抜擢してください。つたときも住大夫師匠のところへ伺ったら、歌舞伎と文楽とはだいぶ違うやろ、せりふ言ってみ、つておっしゃって、そのあと台本お見せしたら全部言ってくださったんです、お師匠さんが。このテープは僕の宝物で、誰にも聞かせません。息子^{ねえ}の虎之介にも（笑）」

これも元はと言えば三林京子さんのおかげだろう。そう言えば、扇雀さんは美空ひばりやら太地喜和子やら、年上の女性からずいぶん可愛がられていたようだ。

「二十代のころ、ひばり姉にはすごく可愛がってもらってました。もともとうちの親父（坂田藤十郎）が映画で共演しててよく知ってたわけですけど、あるときから気に入ってもらって、よく飲み^{ねえ}に連れてってもらいました。歌舞伎座の楽屋口にキャデラックのドーンと車体の長いのが迎えにくるんですが、窓はまっ暗になって、マーク外して家紋の下

り藤なんかついてて、どう見てもその筋の車（笑）。一緒に飲んで、こんな至近距離で『悲しい酒』を歌ってもらったことがあるけど、あるところへ来ると必ず泣きますね。お客は誰一人いなくても。すごかったですよ、あの人の入り方は。

喜和子姉ともしよっちゅう飲んでました。お祖父ちゃん（二代目鴈治郎）の舞台のビデオ持ってきてよ、つて言われて、返すとき、いいわねえ、つて泣きながら言う。哲明さん（勘三郎）観に来たついでに、僕の女方のこともずいぶん言ってくれましたね。

いつか平幹二朗さんと喜和子姉が『鶴八鶴次郎』や『一本刀土俵入』を共演したことがあって、芝居は『一本刀』のお薦のほうがいいけど、『鶴八』の黒の出の衣裳が似合っつてすごくきれいだったから、楽屋へ行っつてすぐに、喜和子姉、きれいだった！ つて言ったら、やっぱり嬉しいんですね、あんた、きれいって言ったの初めてよ、つてすぐにピ

ール出してくれました(笑)」

扇雀さんにとって大きな出会いとなったのは、亡き十八代目勘三郎(当時勘九郎)と昭和六十二年、大阪中座で『檻』(長谷川伸・作)の相手役、女房お若に抜擢されたことだった。

「僕が二十六のときですね。それまでは劇場以外のところでよく会って、僕は酒強いし、映画が好きで、食べることも好きで、飲みに行っても楽しいし、僕ごますらないし、恐れないし……。俺(勘三郎)も江川卓も慶応受けて落ちたんだよ、なんて笑ってましたから、同業の後輩にこんなやつがいたのか、って新鮮だったんじゃないですか? そのうち哲明さんがゴルフ始めたりして、僕はゴルフの先生だったりしましたからね。たちまち距離が近くなったんだと思います。」

それで『檻』のお若ちゃんの役を浩に、^{ひろ}と言ってくれて、大阪行く前に小日向のお宅に

伺って、まだ先代(勘三郎)が生きていらしてその前で二人でやりました。おじさんは、この子誰? って感じでしたね(笑)。その前に『西郷と豚姫』でおじさんが仲居のお玉、僕は舞妓で出てたんですね。だから当日は哲明さんにちよつと注意なさったくらいでした」

それで大阪の初日。

「終って楽屋へ挨拶に行くと、お弟子たちをみんな外へ出して、お若のせりふを全部言ってくれたんです。目の前でやってくれたのはこれ一回きりでした。僕がせりふ言うのと、ダメだ、それじゃ泣けないんだよ、行くぞ、めし、って。そしてまた次の日、ダメだなあ、って。感情の入れ方、表現のし方を説明してくれて、行くぞ、めし、って。ほとんど毎晩一緒に二時、三時でした。」

二十日目ちよつと前くらいに、おい、浩、今日は泣けたよ、お客さんもハンカチ出してたよ、って言われた。僕はそれまったくわか

らないんだけど、相手がそういうお芝居をしてくださるんで、僕は引つ張られるわけですよ。哲明さんが五郎吉になりきってるから、その眼を見て自然に感情が動かされるんです。あるとき五郎ちゃんが酔って暴れてポーンと襖が外れたことがあつて、それを片づけるとき慌てずにお若ちゃんでも処理したら、それをちゃんと見てて、そういうことだよ、お前はお若でいたよ、つてあとで言ってくれた。こいつは俺の言ってることが理解できて、それを体現できるんだな、とそのとき感じてくださったのかもしれないね」

この公演をキツカケに、勘三郎は何かと氣にかけてくれるようになり、扇雀さんがほかの劇場のときも稽古を見に来てくれたりした。

「親戚でもないのに、親父は見もしないのにね（笑）。別にこれいい悪いじゃなくて、それが親父のスタイルなんですよね。」

それで、今考えてみれば『檻』の五郎吉を

哲明さんが初役でつとめたとき、相手役は福助さんだったんです。だから大阪では僕がお若と聞いて怒ったみたいだけど、そのとき彼はスーパースター歌舞伎に出演中だったんで仕方がなかったんです。これも運命なんですね。僕にとつては大変な幸運でした」

勘三郎は扇雀さんの祖父二代目鴈治郎をとっても敬愛していたので、その孫に対する思い入れも特別深かったのかもしれない。

「哲明さんはうちの親父のことも尊敬してくれて、『封印切』の忠兵衛を習いに来たことがありましたよ。来るまでに父そっくりに作ってきてるんで、父もびっくりしてました。よくそこまで取ってる、って感心してました。僕が相手役の梅川だったんですが、本興行になって何日かたったら、哲明さんの中からだんだん自分の空氣が出てくるんでしょ。うね。稽古と千秋楽ではだいぶ違っていました。父の忠兵衛は、最後に梅川を先に引っこまして一人で引っこむんですよ。このときは、忠兵衛

は忘れて役者を見せるんだ、って言うんです。花道で振り返る間とか、舞台のおえんに向ってのお辞儀のし方とか、テクニクのみになるんです。それが哲明さんはやだったんですね。役にどっぷり入りこむ人だから、梅川を先に引っこますなんて、考えられないわけですよ。ほかのおうちの型は全部二人一緒に引っこみますからね。その後、福助さんとやったときは、二人で手を取り合って引っこみた、と言って、そうしていました」

こうした勘三郎の気質、芸質を総て飲みこんでいる扇雀さんは、勘三郎の早すぎた晩年のよき相手役、女房役だった。

勘三郎が耳の病氣から立ち直ったあとだけでも『文七元結』では左官長兵衛女房のおかね、『法界坊』では永楽屋娘お組、最後になった『め組の喧嘩』では辰五郎女房お仲で息の合った好演を見せた。

扇雀さんが『狐狸狐狸ばなし』で勘三郎の

持ち役だった伊之助を立派につとめたのには目を見張ったが、これからやりたい役が『千本桜』『鮎屋』の権太や『俊寛』の俊寛、さらに『忠臣蔵』の大星由良之助と聞いて少なからずびつくりした。

「だって考えてみると歌舞伎の主役は全部立役なんです。三姫（雪姫、時姫、八重垣姫）と言ったって、最後のチョンのときは幕を切るのは立役なんです。だから女方の舞踊がいつばいできるわけですね。主役やるなら立役をめざさないと。だいたいうちの芸の『玩辞楼十二曲』は総て立役の芝居ですからね」

そう言えば扇雀さんの芸域の広さは特筆に価する。

『天網島』の小春治兵衛、『封印切』の梅川忠兵衛、『吉田屋』の夕霧伊左衛門、『曾根崎心中』のお初徳兵衛と、総て両方の役をつとめている。

「うちの父は『曾根崎』の徳兵衛はやってま

せんから、これ全部やってるのは僕だけで、ちよつと自慢なんです。『忠臣蔵』『六段目』のおかるは哲明さん、親父、團十郎さんの勘平でつとめてますし、実は「五、六段目」の勘平も前に国立劇場の鑑賞教室で、上方の型で一度つとめたことがあるんです。僕の勘平悪くなかったですよ（笑）、学生が泣いてましたから。それから『引窓』の南方十次兵衛と女房お早も両方やってますし、『俊寛』では千鳥も丹左衛門も少将も康頼もつとめてます」

昔から芸域の広い役者を「兼ねる役者」と呼び、名優六代目菊五郎がその代表格だった。「現在では父と、今の菊五郎さんと、この間まで哲明さんがいたわけで、その系譜で言うと、僕が来て、菊之助君が来て、雅行（勘九郎）が来るのかな、と思います」

僕ね、この役ができたら役者やめても本望だと思ふのが『忠臣蔵』『四段目』の大星なんです。あの城外のところ。判官様の腹切り

刀をふところから取り出して、仇討を固く心に誓うところ、あそこにあの芝居が全部集約されているんですからね」

上方には『忠臣蔵』の七役を早替りでつとめるといふ珍しい趣向の演目があつて、扇雀さんの父藤十郎の舞台を初めて大阪で観たときは呆氣にとられた。特に「五、六段目」で勘平と与市兵衛と定九郎の三役をめまぐるしく替るのが鮮やかだった。

「ええ、ほかに師直、^{もうのお}由良之助、平右衛門、戸無瀬^{となせ}の四役をつとめるんです。この『九段目』の戸無瀬を本役でつとめない役者には絶対にこの七役替りはできないよ、初役で戸無瀬では無理だよ、って父が言ってますが、この後継者は僕だと思ふ。ですからまず戸無瀬をやらせていただいて、そうすれば待望の由良助ができるわけですからね」

扇雀さんにはまたもう一方で、『曾根崎心中』の演出を変えたい夢がある。

父の主宰する「近松座」に同行したとき、

扇雀さんの『曾根崎心中』お初。

ロンドンの現場で感じることがあったという。
「父の『曾根崎』は、昭和二十八年に宇野信
夫先生が脚色・演出して歌舞伎化したもので

すから、近松門左衛門の人形浄瑠璃の丸本と
はだいぶ違ってきているとありますが、
特に最後の幕切れ、曾根崎の森での心中場面



ですが、最後に徳兵衛が短刀をお初にさしつける形で幕になってしまふ。あのころの演出ではそれが新しかったのかもしれないけど、文楽では二人の身体を結びつけて、まずお初を殺して、それから自分も刺して、お初の上に折り重なって死ぬところまでちゃんと見せるんです。だから大きな感動を呼ぶんだと思う。

十数年前のロンドン公演で、最後に大きな拍手は起ったけどスタンディングオベーションにならなかったのはなぜだろう、って、あとで僕の慶応の同級生でロンドンで大学教授やってるのがいたんで訊いてみたら、やつぱりこのあとで二人は死ぬんだろうとは思いうけども、そこまで見せない、って言うてました。二人が死んでればお客立ってるよ、って。イギリスはシェイクスピアの国だしね、あの芝居はみんなどんどん死んで幕を切るじゃないですか（笑）

そこで扇雀さんは、今度いつか自分が『曾

根崎』を演じるときは演出を変えてもいいですか？ と父親に訊ねたことがあつそうだ。

「いいよ、って父は言いました。その前に僕が大阪の松竹座で『曾根崎』のお初を兄（甕雀）の徳兵衛でつとめたとき、父が稽古を見に来てくれたんですが、何も言わずにさつさと帰っちゃったんです。それで僕は帰ってから父に電話をして、どうでした？ って訊ねたら、しばらく間があつて、嬉しかったよ、ってひと言。うちは親子の関係がちよつと遠いんですけど、僕は嬉しくて、泣きましたよ。受話器持つ手が震えました。今でも思い出すと泣けますけどね」

親と子のつながり方にはさまざまな形があり、その受け継ぎ方もいろいろだろうが、歌舞伎は、こうして親から子へと確かな伝統をつないでゆくのだろう。（この項おわり）

無量寿仏の威神光明、最尊第一なり。諸仏の光明、能く及ばざる所なり。

〔無量寿経〕 卷上「光明歎徳章」

無量寿仏の強大な力みなぎる光明は、み仏方の中でも最も尊く最高〔の輝き〕であり、他の諸々の仏の光明が到底、追隨できるものではない。

（浄土宗総合研究所編訳『現代語訳 浄土三部経』浄土宗より）

次に見るとすれば極楽だろうか　（あの日の長野）

その光景をしつかり目に焼き付けておこうと思った。

それは、一九九八年二月、人、人、人で埋め尽くされた長野市の中央通りの姿。間もなく長野オリンピックが閉幕しようとするなか、歩行者天国となった中央通りは、冗談でも、誇張でも何でもなく、恐らくは何万という単位の数に達しているであろう人で沸き返っていた。長野市の人口と、上下一車線ずつしかない道幅を考えると、とてつもない人数だ。

そこに競技場があるわけでもないのに、選手に会えるわけでもないのに、グッズを求めてか、あるいは雰囲気だけでも余韻に浸りたいのか、まるで魔法でも見ているかのように人が湧いてくる。これがオリンピックの魔力なのか。祭典たる所以だと思った。もともと、その魔法も祭典の閉幕とともに消え去ってしまう。明日の朝になれば、少し寂しい、いつもの中央通りの顔に戻るはず。そう思った私は善光寺に向かって中央通りを上りはじめた。

そもそも長野の中心市街地は扇状地だ。北西から東南に向かって何段階かの下り坂がある。中央通りも長野駅を起点にすれば、緩やかな坂、急な坂、緩やかな坂を上りながら善光寺へと続く。急な坂は通りの中間を占める。その急な坂を上りきると歩行者天国の終点地点。通りにひしめく群衆がゆったり流れる

大河のように見下ろせた。こんな光景、もう二度と見ることはないと思った。

前置きが長くなった。中央通りとは、長野駅前と善光寺を結ぶ二キロ弱の通りのこと。いわば善光寺への表参道で、長野市の中心市街地のど真ん中を貫く。筆者が住まう寺はその中央通りの中間地点にあり、通りに面している。通りには路線バスが走る。最寄りのバス停名は「セントラルスクエア」。今でこそ、そこは民間の駐車場だが、オリンピック時には、毎晩、屋外競技の表彰式が行われていた。モーグルの里谷多英選手やスキージャンプ陣がここで日の丸を掲げ、各国の国歌が極寒の夜空に響きわたった。

毎日が特別だった。特別が普通だった。近所のホテルに両陛下・皇太子ご夫妻が御逗留。競技会場へと往復される車列に向かって毎日のように手を振った。各国のゲストハウスがそこいら中にあり、各国の役員、報道関係者が街を歩き、北欧からの応援客が国旗を振りながら夜な夜な祝杯をあげる。さながら国際都市。世界中の注目がここに集まっている実感があった。それだけじゃない。街中のどこにいても競技場の熱気が伝わってくるような気がした。そこにいるだけで何にでも勇猛果敢にトライできそうな、はたまた新しい自分に出会えるような、そんな高揚感が街を包んでいた。

続々と人が集まって来たのも、今にして思えば、目に見えない何か特別な力に、誰もがあやかりたかったのだろう。たぶんオリンピックの不思議な力に。

ところで、『無量寿経』によれば、無量寿仏（阿弥陀仏）の仏国土、すなわち極楽浄土に往生を望むのは、この無仏の娑婆世界に生きるわれわれ凡夫だけではない。すでに無量寿仏以外のさまざまな御仏の仏国土に住まっている菩薩たちもまた極楽に往生すると言い、その数は計り知れないとされる。

それぞれの仏国土で成仏を目指せばよさそうところ、菩薩方は、なぜ極楽を目指すのか。それは極楽が数ある仏の浄土の中で特別だからだ。毎日が特別で、特別が普通で、誰もが仏になりきれような高揚感に包まれているのだ。なぜなら無量寿仏の光明が仏の中でも特別だから。他の仏の追隨を許さない力強さ、尊さ、輝き。みな、その光明にあやかりたくて、極楽を目指し、極楽に集まるのだ。

もう二度と見ることもないような街の光景。次に見るとすれば極楽だろうか。ソチ五輪か。あの日の長野を思い出した。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第四十九回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

碧眼の比丘、ニヤーナティロカ その8



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は、小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。そんななか、ヨーロッパ初の比丘が誕生したと知り強い関心を覚える。法名は三界の智者を意味するニャーナティロカ。しかし、すでに彼は、海旭と行き違いに、南伝仏教の聖地セイロン（現スリランカ）に渡って修行中。爾来十六年、碧眼比丘が来日、ついに二人に邂逅の時が訪れた。所は海旭が帰国して住職をつとめる深川は西光寺。すでに海旭は日本を代表する社会派和尚。ニャーナティロカは国際仏教界の泰斗となっていた。碧眼比丘が作曲家志望からビルマで比丘になる経緯を話した後、それぞれの救貧活動を語りあったところで、海旭は碧眼比丘の虜囚生活に話題を転じた。

第一次世界大戦勃発、

「敵性国民」として収容所へ

時計をみると午前三時になんなんとしている。渡辺海旭にはニャーナティロカにどうしても訊いておかねばならないことがあった。政治、それも国際問題と宗教とのかかわりである。そこで、こう尋ねて会話を切り換えた。

「救貧について話はずきないのですが、話題をかえて、貴台の抑留生活についてうかがいたい」

碧眼比丘はふうっと深い息をつく、「あれは、忘れもしない、今から六年前の夏……と呟くようにいつて、ポツポツと語りはじめた。

それは海旭の想像をはるかに超える壮絶な物語だった。

大正三年（一九一四）七月二十八日、ヨーロッパの弾薬庫、バルカン半島の小国の首都

で大国・オーストリア皇太子が凶弾に斃れる事件に端を発して世界大戦が勃発。それからわずか十日もしない日のことだった。セイロン南部の町アンバランゴダで支援者が寄進してくれた寺院から戻る途中、いきなり刑事に誰何・拘束され、首都コロンボはフォート地区の警察署に連行されたのである。検束された理由の察しはついた。ドイツ・オーストリア同盟国とイギリス・ロシア・フランス・日本の連合国が戦端を開いたことで、イギリスの支配下にあるセイロン当局としては、在住ドイツ・オーストリア人を監視する必要があるからだ。しかし、たまたま高校（ギムナジウム）の同級であったドイツ大使の同席のもと「政治的に中立である」むねの宣誓に署名すると、ニャーナティロカと弟子の僧侶たちは、そのままココナツ椰子島の「隠遁所」での居住を許された。キリスト教宣教師をふくむ在セイロンのドイツ人たちは「敵性国民」としてラガマの収容所へ送られたので、彼は

宣誓のおかげだと思ったが、それは早とちりだった。

三週間後、シンハラ人とチベット人の見習い僧が「島」から退去を命じられ、ニャーナティロカからドイツ人僧侶は島外への移動を禁じられると、警官が毎日チェックにおとずれるようになった。しかし、それは暫定措置で、十一月一日深夜、全員が熟睡していたところ、警官隊が乱入。ドイツ系キリスト教僧侶と同様にラガマ収容所へ送るので、一時間以内に島を離れる準備をせよと命じられた。警察の話によると、ニャーナティロカからドイツ系仏教徒への特例措置をねたんだ同じドイツ人のキリスト教僧侶の働き掛けによるものだったという。

ニャーナティロカにとつては最も重要な、やりかけのパーリ經典の翻訳草稿とビルマ語の校注を大きな箱につめこんで、船に積み込もうとすると、警察から待ったがかかり、シロアリにやられないよう石油に浸したタオル

に嚴重に包んで土中に埋めていくことにした。村人たちが見守るなか、付き添いの警官に銃をつきつけられて、駅までの通りを行進。列車を乗り継いでラガマ収容所につくと、身体検査をされてから、それぞれがフェンスで隔離された波形トタン屋根の掘立小屋へと収容された。

海旭は、ドイツ留学途上で立ち寄ったときのセイロンの氣候を思い出し、思わず碧眼比丘の話に割って入った。「トタン屋根ですか。それは尋常ではない」

「そう、日中の室内はまさに蒸し風呂です」と碧眼比丘は応じた。「壁に寄りかかろうものなら火傷をしそうになるほどでした。それでも蚊帳を吊ったベッドと机とベンチがあり、食事も僧侶用に精進メニューが供されたので、ココナツ椰子島での蓬庵・粗餐の修行生活を思えば、さして苦にはなりませんでした。それよりもつらかったのは……」

そこで碧眼比丘はくちごもった。

比丘志願の塊皇太子の 庶子、狂乱す

海旭は身を乗り出すと「なにが伝わったのですか」と先を促した。

碧眼比丘は一呼吸おいてから答えた。「わが弟子たちの中に、収容所では僧としての戒律に従う必要はないと考えるものが出てきたのです。ベジタリアンの食事だけは守るが、話すのは政治や戦争のこと。瞑想の時間もモーパーサンを読みふけて、先輩の僧が仏陀の言葉を唱えようものなら、そんなものは盲目的な信仰だと笑う者さえでる始末で……」

海旭は眉根をひそめた。「それはさぞやこたえたでしょうな。戦争という非日常は真の信仰心を検証する鏡でもあるということですか」

碧眼比丘は深くうなずいた。「そのとおりです。しかし、さらにつらいことがわが身を襲いました」といって、またまた碧眼比丘は

くちごもった。

「どうされた。またお弟子さんが、なにか…」と海旭が探りを入れると、ようやくニャーナティロカは語りだした。

「あるドイツ人見習い僧が深刻な心の病いに取うつかれまして」経緯を聞くほどに、海旭は大いに驚くとともにニャーナティロカに深い同情を感じ得なかった。収容所に送り込まれてから、その見習い僧は「全員銃殺される」との強迫観念にとりつかれ、それは日に日に募るばかりだったという。

そのドイツ人の法名はソーニョ。俗名はアルトゥール・フィッツ。一年ほど前、ニャーナティロカを慕ってはるばるオーストリアからやってきた。オーストリア皇子の庶子にして博士号の取得者。ニャーナティロカにとつてこれほどの「超大物」を受け入れるのはじめてだった。超大物だけに得度式も超弩級だった。数千もの人々が特別列車をしたてて来島。その中にはドイツ大使、その大使の弟

で隣国ビルマのオーストリア領事が同国の僧侶を大勢ともなって参加するという賑々しさであった。

そんな「超大物」の乱心だけに、ニャーナティロカ僧侶団にとって動揺と衝撃はさぞや大きかっただろうことは海旭にも推察できた。いっぽうで、海旭は口にはださなかったが、ドイツを中心とするヨーロッパの仏教ブームがソーニョのような「青白きインテリ」に支えられており、それが彼らのアキレスの腱でもあると思われた。その点では、数十人を超える虜囚僧たちを束ねて泰然とふるまうこの碧眼比丘の精神の強靱さは見上げたものだった。

狂人一歩手前のソーニョの病状に、収容所の医者は、ラガマより涼しい高地にある収容所への移送を計らってくれた。というよりも手に余ると判断して厄介払いをしたというほうが正確だったのだろう。

しかし、そこは気温がいくらか低いことを

除けば、いっそうひどいところだった。

社会的に低く見られている肌の黒いシンハラ人と同じ扱いの二等車に乗せられ、しかも銃をもったパンジャブ兵の監視のもと、列車を離れることを許されず、窓から放尿をしてシンハラ人に大いに鬱鬱をかった屈辱の十二時間の旅のすえに、ディヤタラワの収容所へ到着。そこは前の収容所と変わりばえしないトタン葺きのバラックだった。それはなんとか我慢できたが、辛抱の限界を超える大きな障害があった。ニヤーナティロカ一行は建物の三分の一ほどのスペースに収容されたが、薄い木の板で仕切られた残里には、厄介な先客がいたのだ。

そこまで語り終えて、碧眼比丘はまたまた深いため息をついて瞑目した。

荒くれ水兵たちと

同じ収容所に

一難去ってまた一難、今度はどんな一難か

と訝りながら、海旭が「厄介な先客？ それはいったい誰です？」と問うと、碧眼比丘はぼそつと答えた。「あのエムデン号の水兵たちです」

「エムデン号？ ああ、あのインド洋上でイギリスをはじめ連合国の艦船を大いに悩ませた。」と海旭は応じた。

日本でも敵ながら勇猛果敢な活躍ぶりが報道されたので、海旭も承知していた。たしか、フォン・ミューラー艦長の指揮のもと、開戦からわずか四か月間で、連合国側の商船五十一隻、イギリスの軍艦二隻を海中に沈めたが、ついに西オーストラリアのシドニー沖で、イギリスの軍艦によつて撃沈された軽巡洋艦だ。あのエムデン号の水兵たちなら、荒くれぶりは海旭にも容易に想像できた。

マットレスを敷いただけの鉄のベッドにカバーと毛布。椅子はないので島からもちこんだデッキチェアにソーニョを休ませたが、水兵たちの日常的な口論・喧嘩・殴り合いでそ

れは破られ、ソーニヨの病いをいつそう深くした。狂人のように部屋をくるくる走りまわり、腕や頭を壁に打ち付けては「助けて、助けて」と叫ぶ。医者が近づくと、わめきちらして逃げる。ついに所長が後ろからはがいじめに捕まえると、抱き上げて別棟の病院へと収容されることになった。

少し落ち着いたというソーニヨが病院から戻されると、ただでさえ狭いニヤーナティロカ一行のスペースをさらに木の板で仕切り、ベッドを並べてソーニヨを看病することにした。しかし、ソーニヨはガラス窓にわが身をぶつけて自殺を何度も試みるので、一瞬たりとも目をはなすことができない。たえかねて所長に訴えると、快癒するまで病院に収容してもらえることになり、とりあえずソーニヨの看護からは解放されることになった。

それでもニヤーナティロカの難行苦行は続いた。慰問に訪れたシンハラ人の弟子があらわや所長に死刑執行されそうになったのである。

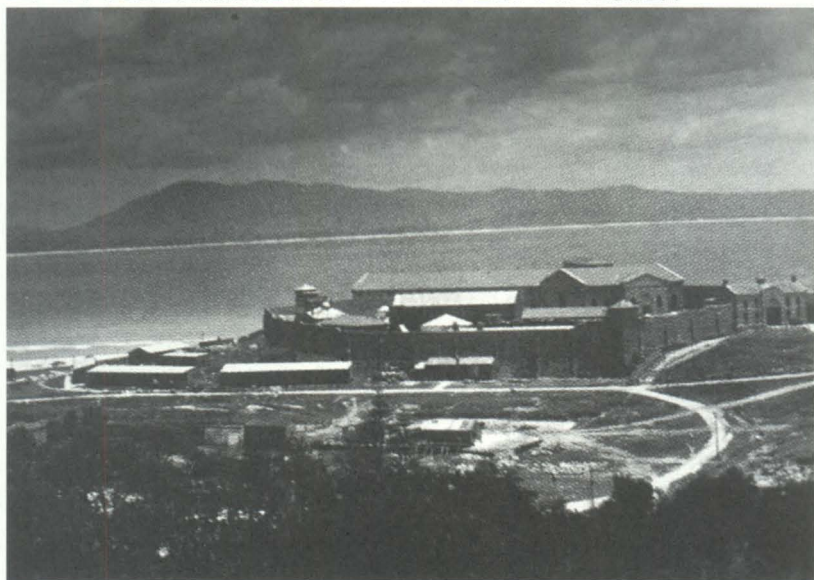
鉄条網ごしにニヤーナティロカに話し掛けようとしたところ、パンジャブ兵に暴行を加えられ、これに抗議したからだ。シンハラ人僧は収容所の規則を知らなかったしパンジャブ語もわからなかった。僧はパンジャブ兵に銃の台座でさんざ殴られたうえに営倉に一晩ぶちこまれた。

脱走計画中に恩赦

セイロン高地での過酷きわまりない難行苦行の虜囚暮らしは一年たらずして、場所を異国に移してさらに続いた。ヨーロッパでは戦火が激しさをいやす翌年の夏、ニヤーナティロカ一行はエムデン号の水兵ともども、イギリス軍艦に乗せられた。十七日間の船旅で送られた先は、くしくもエムデン号が撃沈されたオーストラリア西海岸リバプール郊外の収容所だった。

虜囚の数は六千を超える大所帯で、大半は犯罪者かそれに準じるドイツ系の人々だった。

ニャーナティロカらが最後に収容されたオーストラリア西部トライアル湾収容所



当初オーストラリア政府は、祖父がドイツかオーストリア出身者を「敵性国民」として隔離しようとしたが現実的でないと判断、牧師とビジネスマンを除く犯罪者と生活困難者を抑留。その後、シンガポール、香港、セイロンなど他国からのドイツ人も収容されることになり、ニャーナティロカ一行とエムデン号水兵はセイロン組だった。

ここの収容環境たるや最悪だったセイロン高地の収容所よりも、さらにひどかった。

いきなり麦わら入りの古いじゃがいも袋に寝かされた。亜熱帯であっても南半球の七月は凍えるほど寒い。ニャーナティロカは深い絶望を覚え、ダンテが『神曲』で地獄を描いた一節「ここに入るもの、すべての希望を捨てよ」を思い起こしたという。

窓のない薄い壁でしきられた二棟続きのバラックに、それぞれ百人ていどが収容された。じゃがいも袋で寝るのがせいじっぱいの狭さで、テーブルも椅子も手荷物を入れる函をお



く余裕もない。幾らかでも寛ぎの必要を感じた収容者は監視の目をかいくぐって森へ行き、木を切って掘立小屋を建てるしかなかった。

なによりトイレが最悪だった。地面に穴を掘って、一・五フィートの板が二枚わたしてあるだけ。風雨をしのぐための蔽いなどない。ニャーナティロカは、他人に見られないようにと、わざわざ夜にトイレへ出かけたが、夜は寒く風がつよい。夜陰でのトイレにはサンダルははずしはだしていく。サンダルを泥の中で見失うと発見できないからだ。

そんな悪環境ゆえに脱走事件もしばしば起きた。しかし、トンネルを掘って脱走に成功した者も荒野では食料調達がむりとわかって数ヵ月後にはみな戻ってきた。

その後、セイロン、シンガポール、香港からの「他国組」百五十人ほどがニューカスルの北のトライアル湾近くの古い元刑務所へ船で移送された。そこでニャーナティロカは、後にアメリカで生化学者になるも死体姦事件

を起こすドイツ人から、脱走計画をもちかけられた。小舟をつくって収容所に面する防波堤の巨大な岩陰に隠しておき、沖に船がきたら、その小舟で脱出して助けを求めるという作戦である。しかし、小舟が完成し、そこにチョコレートやらミルクやら乾パンなどを運び込んでいるところに、突然、恩赦で出された。仏教の僧侶とキリストの牧師だけがアメリカ経由で母国ドイツへ送還されることになったのである。これはニャーナティロカの支援者による国際的嘆願活動のおかげであった。

*

こうして碧眼比丘は、足かけ三年にわたる

虜囚暮らしを語り終えた。しばし二人の間に沈黙がたゆたった。海旭は碧眼比丘の物語を胸中で反芻した。反芻すればするほどに数奇にして波乱万丈な顛末に驚きと感動を禁じ得なかった。そのいっぽうで、難行苦行のドラマ性もさることながら、このドラマで碧眼比丘が果たした僧侶らしからぬ俠氣の役回りが、どこか自分に似ていると共感を覚えた。その感情は、その後の碧眼比丘との「釈放後」をめぐるやりとりで、ますます募った。海旭は沈黙をやぶって訊ねた。

「恩赦となっても即故国には戻られなかったのはなぜですか」

（この項づく）

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

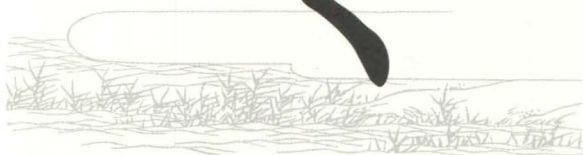
〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)38421289

振替001802145231

第五十九回

江戸を歩く



玉川

森清鑑

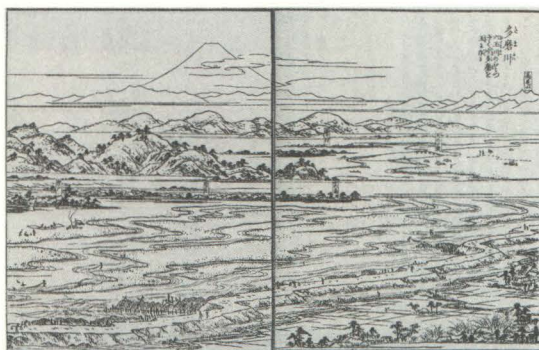
大江戸ウォーカー

る。江戸時代の玉川はまさに清流である。そして川に沿って土手道が蛇行している。盛り土をして堤防となし、その上が道となっている。玉堤。人々が行き交う。この玉堤を歩いて江戸湾まで広々とした美しい風景を楽しみながら歩こう。

駒井村、宿河原 喜多見 江戸氏

右に広大な玉川の河川敷を見ながら、見晴らしの良い玉堤を下流に向かって歩く。振り返ると遠く、大山、丹沢、高尾の峰。そしてその上に霊峰富士が聳えている。登戸を過ぎてもまもなく、駒井村。雪旦はここからも玉川を描く。州から州への橋を渡り、対岸に着くと、そこは宿河原である。此処でも鮎釣りの長竿を肩に担いだ釣り人。対岸の小高い山の先に、丹沢の峰。一番左の大山が描かれている。絵には無いが、駒井村から手前には、喜多見、狛江村がある。ここは江戸氏の末裔、喜多見氏の領地であった。

玉川の近辺には、古墳が多く、豊かな漁を反映し豪族が古代より棲みついていたことを物語っている。古くから武蔵の豪族として名高い秩父氏。平安時代の当主は秩父重綱。その息子が重継で平安末期、武蔵国江戸郷を相続する。そして江戸四郎と称し、江戸氏を興す。江戸桜田の高台に居館を構える（江戸城二の丸地）。当時は眼下に波が押し寄せている。重継は頼朝に従い、奥州征伐にも従軍している。時代を経て江戸氏は豊臣に滅ばされ、また家康に救われ、喜多見に領地を移封。名も喜多見と改める。江戸とは湾の入り口の意味で、平安末期に武蔵で全盛を誇った江戸氏が江戸地名の起源となる。



◆江戸名所図会 雪旦は絵の中央に雲間を描き、右に蛇行する上流の矢野口の渡を書き入れている。

玉川の渡し

江戸時代の玉川には橋がなく、船による「渡し」が東西に行き交う人々の橋のようなもの。このため上流から江戸の渡しまで、すでに二十九もの渡しがある。さらに江戸から下流に向かって二つ目の渡しが二子の渡し（新二子橋）である。これは大山道（相州街道）とつながる渡し。江戸時代隆盛を極めた大山詣での旅人達は、赤坂、青山、池尻、三軒茶屋を通り、この渡しを船で渡る。

さらに玉堤を下流に向かって歩く。すると野毛の渡し（多摩川橋）、等々力の渡し（第三京浜）。そして丸子の渡し（丸子橋）に出る。この渡しは、中原街道を歩いてきた人々が対岸に行くための渡しである。中原街道は江戸でも重要な存在で洗足池の縁を通り、江戸市中へと繋がっている。次が平間の渡しで（ガス橋）、池上道（平間街道）に直結する。そのちよっと下流に矢口渡がある（多摩川大

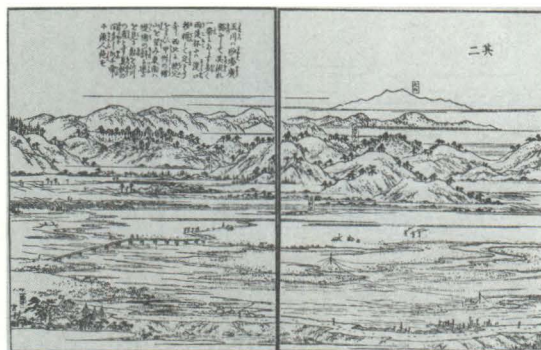
橋、第二京浜、古鎌倉道）。これらの渡しは、いずれも大正から昭和まで活動していた。旅人は皆、船に乗って往還していたのである。

矢口の渡し 新田神社

矢口の渡しは、今の第二京浜と川崎を結ぶところにある。ここで玉堤

から降り、江戸に向かってちよっと歩く。左に折れ、しばらく歩くと新田神社がある。そこは池上道に面している。創建は一三五八年。

新田義貞の子、義興を奉る。この年、新田義興は矢口の渡しで謀殺されたのである。彼は、足利尊氏の死去に好機到来と兵を挙げ鎌倉に向かわんとする。ところが尊氏の子、鎌倉の基氏と関東管領畠山が送り込んだ江戸

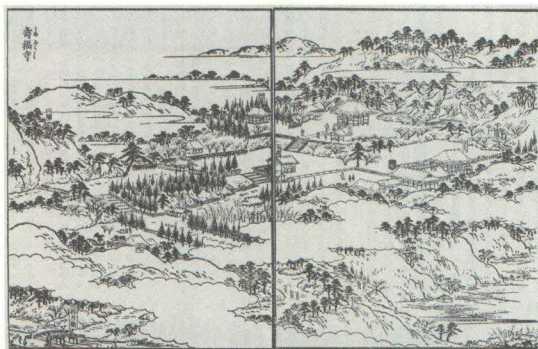


◆江戸名所図会 左下駒井村、対岸は宿河原、右上遠く大山が聳える。

高重と竹沢右京亮によって矢口の渡しで謀殺される。これで新田の血筋は絶えたわけだが、二十八歳で横死した義興の霊を慰めるために地元民が新田大明神として奉ったのである。この頃、玉川は大きく東に迂回しており、矢口の渡し場は、この新田神社のすぐ西側にあった。時代は変わって、玉川の流れの変化に伴い、江戸時代には、渡しの位置が現在の多摩川大橋のところに変わったのである。広い境内の社殿右側に、樹齢七百年のご神木「櫻」が立ち、緑豊かな神社。本殿前の狛犬は「唸る狛犬」。畠山一族縁の者が来ると、うなり声を発したという。瀟洒な本殿裏には約十五メートルの円古墳があり、これは義興の遺骸を埋めた墓といわれている。江戸後期に矢口の渡しが一躍有名になったのは、平賀源内が「神霊矢口の渡し」を書き、歌舞伎の当たりものになったためである。源内はここで「ふたたび御矢、手にはいるからには、官軍を集め、朝敵を亡くして父上の恨みを散ぜん」

代々伝わるこの御矢、我が家の武運長久の守り…」と書いた。そして神社の竹を切り、破魔矢として売り出したのである。今日至る所の神社の初詣で手にする破魔矢の風習は、ここから始まった。こうしたこともあって、江戸っ子はこぞって新田神社に参拝したのである。

再び玉堤を歩いて下流に向かう。まもなく小向の渡しがあつて、次が六郷の渡し（六郷橋）である。これは東海道に直結する。大石内蔵助も川崎宿で泊まり、この渡しを船で渡って、江戸に入った。雪旦の六郷渡し場の光景は、当時の状況をリアルに伝えている。船が横付けにされ、町民、武士様々な身なりの人が乗り込んでいる。おうい、待つ



◆江戸名所図会 「六郷渡場」

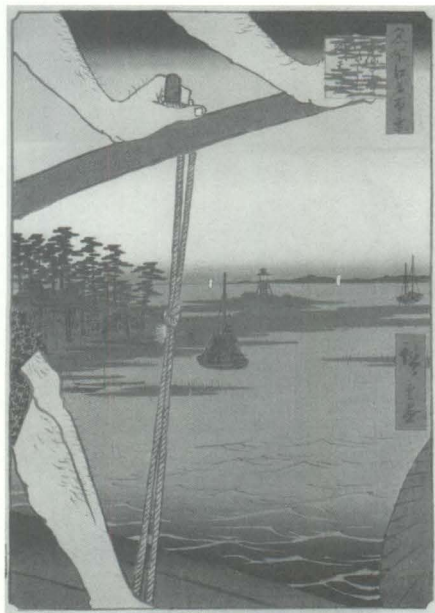
てくれと叫びながら船に向かって走る人。馬から荷を下ろし、家来に指図している武士。葦簀張りの小屋で悠然とくつろぐ人。対岸には川崎村の家が並んでいる。

江戸湾河口近くの羽田村に入ると、大師の渡しがある。明治二十九年の開業。そして最後が羽田の渡しである。これは、大師の渡し（大師橋、第二京浜）といくとも変わらぬ位置にある。この渡しも川崎大師への参拝客が引きも切らずに利用した。船で渡ると川崎大師河原。ちよつと西に行くと川崎大師。正式には真言宗大本山平間寺。十一代將軍家斉が厄除けに訪れたことから、厄除け大師として、初詣での参拝客で大変な賑わいとなる。今日、初詣に約三百万人が訪れる。

この羽田の渡しから江戸湾に向かって描いたのが広重の「はねたのわたし弁天の社」である。船頭が船縁に足をかけ、櫓をこいている。江戸湾に向かって左上に鳥居があり、弁天様が立っている。羽田の弁天様（今日、羽

田空港の西端）。その先には常夜灯が立つ（灯台）。遠くに帆掛け船が見える。船頭の手と足から広がる江戸湾の構図。この遠近法の大胆な構図がフランス印象派のロートレックに多大な影響を与えた。ここから浦賀や房総の山々が絵のように見えたそうである。今日では想像もつかぬ光景である。

左中央に羽田弁天の社。海に向かって常夜



◆広重 「はねたのわたし弁天の社」渡し船を漕ぐ、船頭の腕と足の間から望む江戸湾。

灯があり、夜間灯台の役割を果たす。

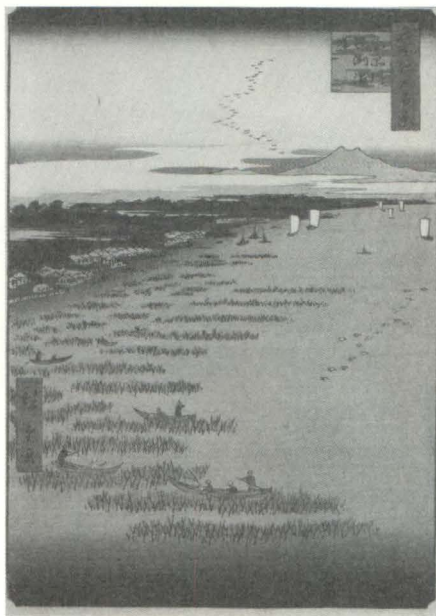
再び六郷の渡しの処に戻って、東海道を南品川宿に向かつて歩く。途中、蒲田、大森を抜けて、東海道は海縁に出る。鈴ヶ森刑場を左に見てちよつと行くと南品川宿である。この海岸縁が鮫洲海岸。海苔の栽培が盛んでここで獲れた豊富な海苔が乾海苔に加工され、浅草海苔として売られ、人気を集めた。江戸湾に流れ込む、玉川、目黒川、立会川、呑川の清流が最適な海苔漁場を造ったのである。広重は東へと回り込む東海道から品川に向かつて海苔栽培の現場を描いている。左側が鮫洲海岸で遙か前方に筑波山が聳えている。鳥や船の一群がいたるところに描かれている。

東海道を品川へ、

そして池上道を玉川へ戻る

東海道を品川に向かつて歩く。蒲田、大森。蒲田村から右へ。すると蒲田の梅園がある。蒲田から大森にかけて土質が梅の木に適して

いた。農民は畑に梅を植え、獲れた梅干しを売る。江戸湾で獲れた海苔と合わせ、江戸市民が買い求めてくる大森土産。そこに四軒もの梅園ができ、四阿屋や茶屋を配し、憩いの場とした（梅屋敷）。この梅園は江戸の名所となり、広重もその景観を描いている。文人、墨客のみならず、東海道を行く旅人、川崎大師へお参りの人、参勤交代の大名達、将軍は



◆広重 「南品川鮫洲海岸」

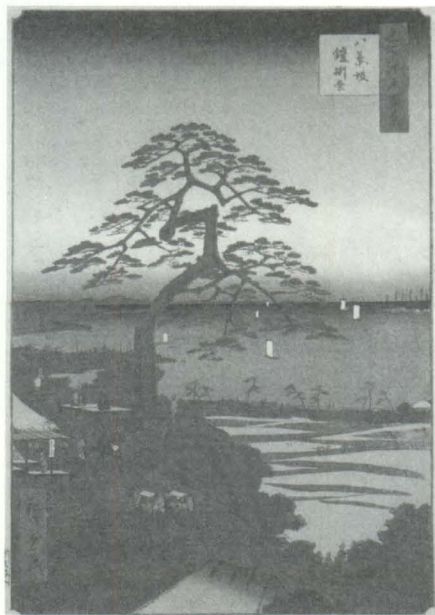
鷹狩りついでに訪れる。

鎧掛け松

東海道を三つの川を渡って（呑川、立会川、目黒川）、南品川の宿に着くと、そこから逆方向に玉川に向かって行く道がある。これが世人曰く、池上道（平間街道）。目黒川を渡ると、大井村にでる。道は登りとなっていく。登って下ると新井宿。この間に鎧掛け松が聳えている。ここから江戸湾を見下ろす。絶景。茶屋があり、馬を休め、二丁の駕籠が上がってくる。江戸湾を眼下に見下ろし、帆掛け船を抱いた江戸湾との境に松の木が並ぶ。これが今歩いてきた東海道。坂はその昔、薬研坂と呼んでいたがここからの絶景を楽しむ江戸っ子が増え、見渡しの良さから八景坂と呼ばれるようになった。頂点に聳える一本の松は鎧掛け松。八幡太郎義家が奥州征伐の際、ここで休憩。鎧を脱ぎ、この松にかけた。

池上本門寺

坂は下ったり登ったり。やがて右側に池上本門寺の壮大な寺領が見えてくる。左を見ると呑川が流れ、そこからは迫り上がった台地である。日蓮宗の大本山。一二八二年日蓮はこの地の池上邸で没する。江戸期に徳川家との密接な関係が築かれ、関東有数の巨利となる。池上道を右に曲がると左右は住家が密集

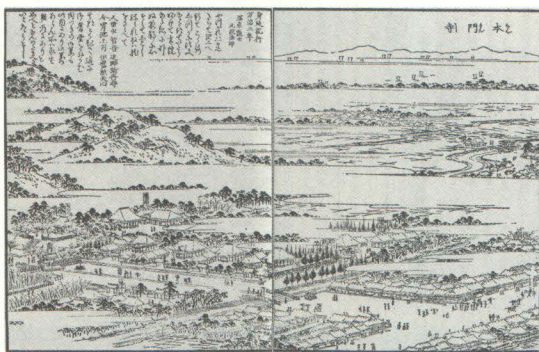


◆広重 「八景坂鎧掛け松」

している門前町。呑川を渡る橋の左に南無妙法蓮華經のお題目が深く刻まれた大石塔が建っている（参詣客の目印）。橋を渡って参道へ。左右は塔頭が建ち並び総門へ。これは元禄に建てられ、上に掲げられている扁額の文字は熱心な法華経信者本阿弥光悦の書。光悦は名筆家であるとともに当代随一の陶芸家、刀の鑑定家。光悦の茶碗は今もって凌駕できない逸品とされている。まさに簡素で洗練された雅の極地。この国宝は今、三井記念館で見ることができ。門を潜ると本門寺名物の急で長い石段が続く。これは加藤清正の造営。登り切ると広い境内に出る。仁王門が聳え、左側に鐘楼（清正の娘で紀伊徳川頼宣の妻の寄進）、正面に祖師堂（大堂、一六〇六年加藤清正建立）。祖師堂の左手前の靈宝殿の裏には加藤清正の供養塔、本門寺最大級の宝篋印塔である（頼宣の正室、清正の娘あま姫の建立）。祖師堂の左に釈迦堂がある。その先には経蔵があり（二七八四建立）、興味深い

ことに天海僧正による一切経五千巻も納められている。そして祖師堂の背後に、低い塀が巡らされた本殿（社務所）の庫裏が並ぶ（現在釈迦堂が本殿に移転）。その背後、当山で最も高い位置に日蓮聖人の御灰骨を奉安する御廟所がある。また、本殿の右側には松涛園があり、池泉の湧き水池を中心に見事な庭園があるが、これは小堀遠州が作庭したものである。

入り口に戻って、今度は、仁王門右手の参道を行くと、奥深くに五重塔が聳える。高さ二十九メートル。二代秀忠の乳母正心院が秀忠病氣治癒のお礼に建てた国の重要文化財。この荘厳な総門、五重塔ともに戦災を免れ、江戸の趣をそのまま伝えている。そして五重



◆江戸名所図会 本門寺
右下池上道から呑み川を渡って左下総門。

塔の近くには、大名家の層塔、墓所が点在している。まず、前田利家側室寿福院（本名千代保）の十一層の層塔、近くに加藤清正室の層塔、細川家の墓所、奥平家の墓所、池田家の墓所、細川家・上杉家の墓所、徳川吉宗側室の墓、高松・松平家の墓。

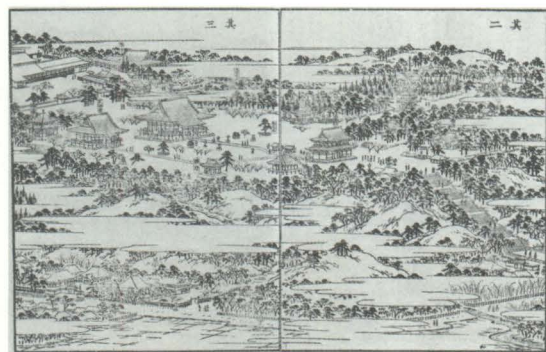
釈迦堂のちよつと先を左に曲がつて長い石段を下りる。大坊坂。半分まで降りて右に入ると、立派な宝塔が建っている。巨大な朱塗りの塔堂。こここそが日蓮が茶毘に付された場所なのである。当初は灰堂という建物であったが一八二八年日蓮の五百五十遠忌にこの宝塔が建てられた。宝塔の前に狩野家の墓地がある。南の院。狩野孝信、探幽、尚信といった、幕府お抱えの著名な絵師狩野家歴代の墓である。宝塔から曲がりくねった坂道を上がつていくと広い空間が開け、巨大な墓石が八基並んでいる。一際高く聳える石塔。これが御三家紀州徳川家の墓所である。ここには、家康の側室お万の方（頼宣の生母）、紀州徳川

家初代頼宣（家康の子）の正室（加藤清正の娘、あま姫）、八代吉宗の側室などが眠っている。そして大坊坂の石段を下りきると右手に日蓮聖人茶毘所がある。その左に日蓮も使った井戸。そして池上大坊、本行寺。ここが嘗ての池上公の屋敷で日蓮聖人がご臨終を迎えたところである。

今、本門寺には多くの著名人が眠っている。宝塔近辺には、花柳章太郎、溝口健二など。五重塔側には、幸田露伴、市川雷蔵、松本幸四郎、永田雅一、力道山など。

本門寺を参拝し、池上道（平間街道）を西に直進するとやがて右側に新田神社が見え、さらに歩くと玉川の平間、矢口の渡しに出る。

（つづく）



◆江戸名所図会 右長い石段を登ると仁王門。右五重塔。境内をまっすぐ行くと祖師堂、本殿。

浄土誌上句会

●いま

〔特選〕
老僧のいまめく帽子冬日受く

佐藤 雅子

禪宗なら「もうす」だが、宗派によつて呼び名が違うのだろうか。帽子を「いまめく」というのは、一目で僧と分かる服装なのだろう。この頃服装も「いまめく」で、僧とは分らない若者も珍しくなっているが。

〔佳作〕

いましがたお帰りやした寒の梅

小林 苑を

いま在りしもの見当たらぬ寒さかな

浜 悠子

帰省子へいま煮え上がる河豚の鍋

井村 善也

●いつで

〔特選〕
冬すみれこゝで曲がれば法隆寺

濱野 東人

法隆寺を目指して歩いて行く。「こゝで曲がれば」は町角などの標識にあつたのだろうか。もうすぐだというほつとした気持ちか、

一句になったのだろう。五重の塔は近づくと
案外目印にはならないものである。

〈佳作〉

いまここで判子をつけと掘炬燵

国立 由起

ここでまた会う約束や忘年会

増田 信子

浜掃除ここであそこで焚き火して

石原 新

●自由題

〈特選〉
廃校の鉄棒に干す伊勢大根

浜口 佳春

伊勢市近郊は大根の産地として知られてい
て、電車からは干し連らねているのがよく見
られた。漬物にするのだ。この句のは廃校の
鉄棒を利用しているのだから、自分の家で食
べるだけだろう。廃物の使い道を見る。

〈佳作〉

指先は小銭の匂い初詣

山王由香利

小春風葉をとんと忘れおり

山口 信子

我が席は市長の隣成人式

中村 真一



誌上句会〈編集部選〉

■いま

さびしくもいまを盛りの石路の花
シクラメン今更何を祈らんか
森 懐人
猫たちよいま居るだけで極楽よ
飯島英徳
入り日いま南京梅をかすめけり
鳥羽 粹
いま涙落ちゆく先のおでんかな
横山富美子
湯気たてていまスクラムは不動なり
笠井亜子
いま雪の生まれる前の匂いして
内藤隼人
恵方いま荒れなんとするオホーソク
小島圭太
いま来るは毛布にくるむ赤子かな
増田信子

■ここで

行く年やここで一つの区切りかも
佐藤雅子

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一四年三月二十日

発表・『浄土』二〇一四年五月号

選者・増田河郎子（「南風」主宰）

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

兼題 風習 自由題

■自由題

僧の声牙え牙えとして狐雨
坪庭の柿の実五つ生き残り
波の間に声たしかめる千鳥かな
笑いながら笑いながら枯葉が積もる
花一輪受けて鎮まる寒の水
泣く人も泣かせた人もおでん食う
数日来いやな咳する雪女
福笑こんな女に誰がした
大寒の固きバターを薄く削ぐ
寒鴉一羽が昼を睥睨す
福袋ひとつは破れ売れ残る
ことごとく家事はかどりて小春かな

枯野原ここで生きてる小花あり
信濃路やここで交せし艶話
ここで死ぬ人だけが住む雪の村
ここですと言うので見れば冬の沼
ここで座す無蓋の貨車や冬の雨
ここですと雪女見た場所を指す
ここで言う夜空とは鮫鱈のこと
本当にここでいいのか初詣
初夢のここで目覚める予感して
刃を入れてここで勝負となる南瓜

當間あさ子

森 懐人

斉田 仁

西原規夫

村松芳郎

山内桃児

村田 篠

大森沙織

内藤隼人

山口信子

佐藤雅子

森 懐人

當間あさ子

鈴木真理子

長谷川 裕

柴田由布子

本郷恒彦

和田幸作

梅沢隆司

龍野美美

小川吾郎

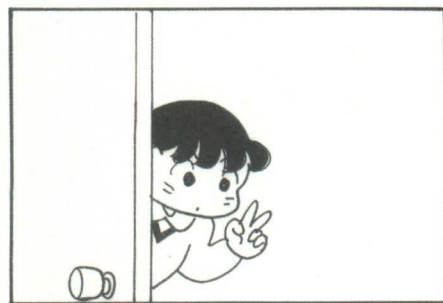
吉崎美和子

さっちゃんねネッ

かまち♡よろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



編集後記

寒明けや寒さの厳しさ裏腹に 岱潤

小学校の時から友人に突然こんな質問を受けた。「お寺で檀家の法事以外に、お施餓鬼とかお十夜とかの法要があるけど、あれは我々檀家に何を伝えたくてやっているの？」立ち話でもあったので簡単に「仏教の教えを伝えるために行う行事なんだよ」とすると彼は「そうだよ。でもうちの菩提寺の住職は、立ち居振る舞い」だと言ったんだよ。僕はそれなら歌舞伎でも見に行くよと言ってしまった」と言って笑っていた。以前法式の先生が「僧侶がちゃんとした立ち居振る舞いを見せれば、法話などいらない」と

豪語していたことを思い出した。

先日『中外日報』で、「立ち居振る舞いがお坊さんを決める」という記事を目にしたが、中を読むと僧侶としての日常生活のことを言っていた。これはなかなか厳しい話であった。

一般の人が僧侶に期待することは、こうした毎日の積み上げのこのようだ。毎日の積み上げが、お経の声にも塔婆の字にも法話の話の内容にも、すべてはつきり出てわかってしまうからだろう。確かに身の所作もその一つかもしれない。しかし檀家が感心するのは、正座を長くしていられるかどうか位のこと、最近のように僧侶の方が椅子席といった本堂

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 糸原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 田中光成(町田・養運寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(大本山・清浄華院)
 脇博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 宮林昭彦(大本山・光明寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

浄土

八十巻二三月号 頒価六百円
 年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年一月二十日

発行 平成二十六年二月一日

発行人

編集人

印刷所 株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・六九四七

振替 〇一八・〇八・八二八七

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

は、いかがなものかと考えてしまう。世の中が不安定になり、寺に来る人がイライラしているとき、僧侶はできるだけ期待に添うことを見せたいものである。

(長)

泰雲の

文と写真

美味探訪



浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

日本橋よし町^{ちょう} 東京・銀座

大寒より15日目、立春の前夜は節分です。「鬼は外、福は内」と連呼して悪鬼を退散させた子供の頃も、「鬼念仏」という言葉を知る身になった今も如月の寒さはかわらず厳しく感じます。

今回はこの寒さを忘れさせてくれる東京・銀座8丁目の中華料理店、銀座にあるけれど店名『日本橋よし町』のご紹介です。

新橋から外堀通りを5分。日航ホテルの手前ケーキ店「マルキーズ」の地下1階。白木のカウンター5席と4人掛けテーブル3卓のこじんまりした店内は、中華料理店というより日本料理店の風情です。

創業は明治38年。日本橋芳町の「大勝軒総本店」から人形町「大勝軒」、そして銀座『日本橋よし町』と味を引き継いで来ました。

このお店の「叉焼雲吞麺」(1400円)の澄んだ清湯の醤油味のスープは絶品で、細麺との相性が抜群です。ズワイ蟹とタラバ蟹を惜しげもなく使った「蟹肉炒飯」(スープ付、1400円)と「天津丼」(スープ付、1400円)は、お店のオススメ。

一見さりげないのに奥の深い程良さは、出過ぎない大人の格を感じさせる中華料理です。

東京都中央区銀座8-4-21 保坂ビルB1F

03-3573-0557

営業時間 11:30~LO13:30

16:30~LO20:00

定休日 日曜・祝日

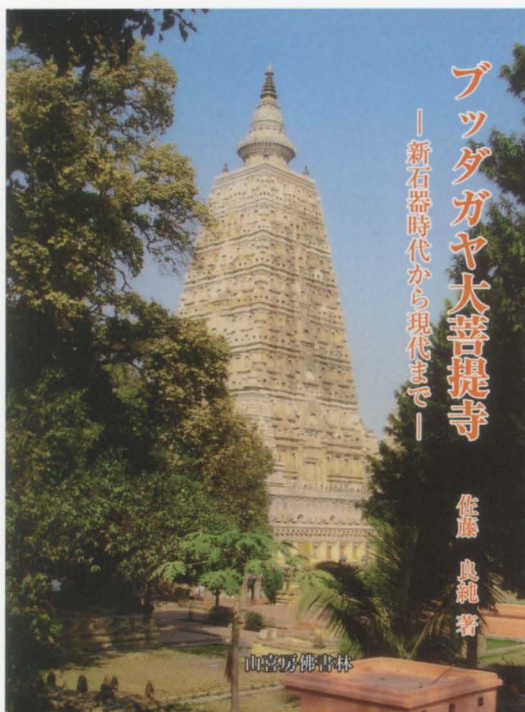
待望の書、刊行なる！

ブツダガヤ 大菩提寺

佐藤良純 著

ブツダガヤ大菩提寺
—新石器時代から現代まで—

佐藤 良純 著



ブツダガヤの歴史
全貌が明らかに！

山喜房佛書林

本体2000円